

## 説教要旨「イースターの喜び」

ルカによる福音書 15章 11～24節

ある人に二人の息子がいて、弟の方が父に「わたしが頂くことになっている財産の分け前をください」と言いました。それは、父が死んだら自分が相続するはずの遺産の先払いを要求しているのです。この失礼千万な息子の要求に父は何も言わずに応えます。父が財産を二人の息子に分け与えると、弟は与えられた財産を全て換金して遠い国に旅立った。彼はそこで放蕩の限りを尽くして、財産を無駄遣いし、すっからかんになってしまいました。そこに飢饉が起り食べるにも困るどん底の生活のなかで彼は、父の家での生活がいかに恵まれていたのかに気付かされます。それは同時に自らが取り返しのつかない過ちを犯した罪への気付きです。そして彼は父の家に帰る決意をしました。この息子がボロボロになって帰って来るのを、父はまだ遠く離れていたのに見つけ、憐れに思い、走り寄って首を抱き、接吻します。ろくでもない息子の帰りをこの父はずっと待っていたのです。「もう息子と呼ばれる資格はありません。雇い人の一人にしてください」。と願う息子を、愛する息子として迎え入れ、「食べて祝おう。この息子は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったからだ」。と言って息子の帰還を祝う祝宴を始めるのです。それはもはや人間の常識では考えられない、あり得ない姿です。

ここにイースターの喜びがあります。身勝手に、どうしようもなく愚かで、取り返しもようのない過ちを犯し、見捨てられて当たり前のものであるのに、それでも愛する息子として受け入れていただける喜びを祝う。それがイースターの喜びなのです。



(2018・4・1 説教者：稲垣真実)